



妙向尼画像（複製）

ようこそ！ 美濃金山城へ

5

「信長様と蘭丸の思い出」

語り 妙向尼（森蘭丸の母）

妙向尼みょうこうにでございます。今下度、信長様がこの金山城にお越しになられたの、ことを偲んでおりました。

天正十年（1582年）三月九日、信長様は我が子蘭丸らを案内人に、森家の城・金山城へお越しになりました。近江に壮大な安土城を築かれ、そのご威光を天下に知らしめてからまた程ない頃です。木曾川を上った船が城下の川湊に着くと、町人へのお土産としてたくさん積み荷が降ろされ、城下はお祭り騒ぎとなりました。

信長様は蘭丸の功に報い、安土城を真似た城の建設をお許しになりました。金山城の本丸では、信長様からいただいた金銀、屋根瓦や材木を使い、多くの職人が天守や御殿、櫓や土塙、そして高石垣を完成させたばかりでした。金山



信長の休み石

城は絢爛に生まれ変わりました。その日は、亡き夫・可成よしなりの菩提を弔うため、金山城本丸の新築祝いも兼ねてお越しになられたのです。この戦国の世にあつて、金山城は一度も攻められず、森家は、今や東濃帯を手中に収めようとしています。



美濃金山城跡からの眺望

信長様は、誠に縁起のよい城だと気に入られ、二層の天守の屋根には、何と安土城と同じ金箔瓦まで上げてくださりました。

信長様のご接待は、城下を挙げて海の幸、川の幸、山の幸、古今東西のあらゆる珍味が揃えられ、数日間続きました。百五十疊もある本丸御殿の大広間や茶室では、その道具仕立ても、久々に焼かれた一級の名茶や唐物の名品などを用い、贅を尽くしたものでした。

信長様は、宴の合間に蘭丸と私をお誘いになり、城の近辺を散策されました。そして、苔生す大岩にどっかりと腰を据えられ、こつこつぶやかれました。「転石苔を生さず

じや」と。信長様は、「古い慣習や伝統にとらわれず、因々の変化に対応して工夫を凝らし、世の中を変えていかなければ皆が幸せにならない」と、おっしゃりたかったのではないのでしょうか。

それから三か月後の天正十年六月二日、信長様は我が子蘭丸らとともに、本能寺で討ち死にされました。そのご遺訓は、今でも私どもの心に深く刻まれています。

「変革への勇氣」は、現代の可見市政にも引き継いでいかねばなりません。美濃金山城跡に立ち、眼下に流れる木曾川や周辺の諸城など、当時の壮大な景色に思いを馳せる時、四百年の時を超えて、本物の歴史が語り掛けてくれます。

「ようこそ！市長室へ」
も夏休み。「美濃金山城」への思いを妙向尼様の□をお借りして、語ってみました。私の勝手な空想物語です。

可見市長 富田成輝